

Title	服飾教育におけるデザイン教育
Author(s)	鈴木, 桜子
Citation	デザイン理論. 61 P. 158-P. 159
Issue Date	2013-01-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/53370
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

服飾教育におけるデザイン教育

鈴木桜子／杉野服飾大学

本報告は、服飾教育が洋裁学校によって推し進められていく1920年代から辿り、服飾教育の現場におけるデザイン教育がどのように行なわれてきたか、現在に至る経緯とその問題を提起するものである。ここでは、服飾教育のモデル校の一つに位置付けられるドレスメーカー学院（1926年創立、通称ドレメ）が、戦後、短期大学部、大学を併設していく過程も踏まえて報告した。

1. 洋裁教育の黎明期

日本における洋裁教育は、和装から洋装への転換を図るために、洋服の型紙・裁断・縫製法を教える、いわゆる技術教育から始まった。授業の規定細目には部分縫いからはじまり、ベビー服から婦人スーツ、ドレス等、あらゆる細目が用意された。デザインは、欧米のスタイルブックを参考に、基本的な形に装飾を加えたり、生地や色味を変える等、アレンジによるものであった。ドレメの創設者である杉野芳子の当初の目的は、アメリカで学んだ合理的な型紙製図を広めることにあった。そのため、デザインに関する実践的取組みまでに至る段階ではなかった。杉野は型紙・裁断・縫製と共に、装いの仕方について、教室外では新聞・雑誌、講習会等で教授していくという精力的な活動をこなしていく。やがて1928年頃から、洋裁が徐々に女性たちの間で普及していくにつれ、洋装店やデパートでの作品コンクールも行なわれるようになっていった。

このように洋裁教育の黎明期は、個人による洋裁教室・学校、また教室外でのメディア

を利用した教育普及によって大きく発展を遂げていくことになる。

洋裁は、女性に花嫁修業の一環として嗜まれる印象もあったが、洋裁学校で身につけた技術で、自分の服の他にも家族や知人から頼まれて洋服を作り、多少の収入を得ていた生徒も多かったという。更に地方から上京して学んだ生徒の中には、帰郷した後に洋裁教室や学校を開設した者も少なくない。以前より裁縫を嗜む女性たちが洋裁を身につけることはごく自然な流れであり、家事にとどまらず、社会との繋がりを強めて職業婦人の育成にも貢献するほどに、洋裁学校の存在は社会における重要な位置を占めることにもなる。

2. 洋裁教育からデザイン教育へ

1930年代末は、洋裁教育において新たな段階へ進もうとする時期であった。ドレメは1939年に「デザイナー養成科」を設置する。当時の学校案内には「我国で着られる洋服は、我国婦人の体格を基礎として、それに気候、生活様式、慣習を考慮して我国独自の立場から創案されなければならないのでありますが、このデザインを創案する技術を養成する目的で設けられたのがこの科であります。」とあり、「日本人の洋装は、日本人デザイナーの手で日本人向きにデザインされなければならない」と予てから抱いていた構想をデザイナー養成科の開設によって推し進めていく。また、戦局の波も押し寄せる中で欧米のスタイルブックも規制され、ファッション情報が得られなくなったことも背景の一つになった。雑誌等を参考に模倣的なデザインをすること

がデザインの手法となっていた日本は、自らデザインを考案していく状況に置かれたのである。以降、洋裁学校のカリキュラムには、洋裁の他に、ファッション画、色彩学、服装史等、歴史と理論を学ぶ科目が、欧米ファッションの理解とデザインの実践のために設定された。それらは洋裁教育の中で取組まれていくものであった。

3. 服飾教育におけるデザイン教育の曖昧さ

戦後、相次ぐ洋裁学校の設立やデザインコンテスト等のブーム、更にパリ・オートクチュールのクチュリエたちの来日に、依然として日本は欧米ファッション追従姿勢にあった。これは、服飾デザインの質的向上をもたらしたものであったとは必ずしも言い難かった。更に、学校教育法により、洋裁学校を母体とした短大・大学が創設されていく。これにより、服飾教育における専門学校と短大・大学のデザイン教育の課題は、曖昧模糊とした状況に置かれていくことになる。そこから見えてくるのは、何の専門家を育成していくのか、ということである。技術者の育成なのか、デザイナーの育成なのか、また、短大・大学に至っては、家庭科教員の育成なのか、幅広い服飾専門家の育成なのか、いずれを目的とするのか、である。専門性と選択肢の広がりを見せながらも、曖昧な服飾専門家を生み出し兼ねない教育体制であった。

特に大学の場合は、服飾教育が「家政学部」における「被服学科」としての位置付けがなされ、学制の改組による女子教育の進展の中に組み込まれたことで、いわゆる女子大学の主要な学部となっていった。杉野の場合、海外の大学において芸術大学に服飾教育を位置付けるものもあることを例に、短大創設時点（1950年）で、芸術大学としての被服学部の構想をたてていた。しかし、当時の文部省

には認められなかったという経緯があった。

服飾教育が大学家政学部被服学科として組み込まれていく流れの中で、以前から洋裁学校で設定されていた歴史や理論に関する科目が、短大・大学または一般向けに服飾デザイン関連の教科書として刊行されていくようになった。例として中田満雄『服飾デザインの基礎』（1958）、宮下孝雄『被服図案 被服デザインの学び方』（1958）、杉野芳子『服飾デザイン』（1967）等がある。これらは概説書としての役割を果たすものの、デザイン教育の中で位置付けられていくものではなかった。

4. さいごに

現在、服飾産業界は多様化し、服飾教育の現場は専門性の特化を謳っているように思われる。しかし、教育現場における細分化されたカリキュラムは、ともすれば沢山の科目の集合にすぎない。その中でデザイン教育は依然として明確なビジョンを持ちえず、商業主義のもとに隷属的にデザインが存在していることは否めない。それでも学生たちは、与えられた教育環境の中でデザイナー幻想を抱き続ける。

服飾教育におけるデザイン教育をこれまでの経緯と共に現在の課題として捉えるならば、洋裁（技術）教育とデザイン教育を明確に分けた上で、個々の領域が「服飾」と具体的にどのように結び合っていくかということを深く考え、包括的な視点を養うことが重要なのではないだろうか。

デザインは色や形の問題ではない。社会、経済、科学技術、美的観点が抱合されていくプロセスから生まれる造形である。服飾となれば個人的な趣味嗜好も絡み、単純ではない。魅力的なデザインだけではなく、正しいデザインへと導けるデザイン教育の確立が急務である。